映画　「白バラは死なず」の紹介

管　理　人

学生時代「白ばらは散らず」（未来杜刊）という本に出会った。題名への興味から買って読んだのが、「白バラ」と称する反ナチ抵抗運動グループを知った最初だった。今から１１年前のことになる。

ナチス・ドイツは、人間性を抹殺した悪の「第三帝国」として想起される。と同時に、どこの国、どの監督を問わず、映画の中に描かれるナチス・ドイツは、鉄カブトと、カギ十字の”悪いドイツ軍”である。しかし、それを一面的ににとらえてしまうと、ドイツ内部にあった、レジスタンスも軍内部の反ヒトラーの動きも見落してしまう。（これは私たち国の歴史についても言える）

映画「白バラは死なず」は、このドイツ国内での抵抗連動の一つにスポットをあて、その史実を忠実にたどることによって作られた作品である。「白バラ」抵抗運動は、西ドイツ国内では、かなり広く知られている運動であり、このグループが在学した、ミュンヘン大学には、彼らを記念したレリーフがあり披らの名をつけた広場がある。「白バラ」に関する文献は、日本では、冒頭にあげた以外に数種が発刊されているし、ナチズムを扱った本の中にも、時折出てくるので、その全体像は、ほぼ把握することができる。

監督は、ミヒャエル・フェアヘーヘンといい、ベトナム反戦運動をきっかけとして「白バラ」を作品にしたという。又、「白バラ」グループの肉親、婚約者の中には生存している者もいるという。
こうして、この映画は、ナチスの抵抗運動を描いたのみならず、現在の私たちのありようへの鋭い警鐘となっている。

映画の簡単な紹介をすると・・・

時代は、１９４２年、ミュンヘン大学。

ナチスの窒息しそうな独裁の下で、自国の犯している犯罪（ユダヤ人虐殺、仏・ポーランド・ソ連への侵略等々）を告発し、内部から抵抗を呼びかけるビラが出た。
それは当時の多くの人々が、共通の思いとして感じていた内容であり、それを十分に知りつくしていたナチ当局は、必死に回収し、出所をつきとめようとした。
一方、そうした思いを持ちつつも、ナチの権力の前に、ビラを当局に届け出る者も多数であった。このビラは「白バラ」と題されていた。
これが「白バラ抵抗運動」と後に言われる運動の開始だった。映画の登場人物は、実名で、すべて実在の人物である。

ソフィー・ショルは、まだ入学したばかりであったが、このビラを大学構内で見、抵

抗運動があることを知る。そして、それを、自分の兄たちが作ったものであることも知ってしまう。兄・ハンスは、ゾフィーを、この「白バラ」から遠ざけようとするが、ゾフィーの決意は固く、やがて彼女を含め５人の学生で「白バラ」を発行していく。そして哲学の教授フーバーも、これに加わっていった。

当時、大学もナチの支配下にあり、男子学生は学生中隊に組織され、女子学生は勤労奉仕に従事することが、学業を続ける前提条件としてあった。ハンスらは、東部戦線に動員され、噂で聞いていたユダヤ人虐殺の現場を見、ゾフィーは工場動員で、捕虜のロシア人女性と出会い、反戦の意志をさらに固めた。

そして再び大学に戻った５人は、さらに反戦の意志を明確にして「白バラ」を作りはじめた。ペンキによるヒトラー反対の落書きも命がけだった。

そして１９４３年２月１８日、大学構内でビラをまいていたハンスとゾフィーの二人は、ナチ党員ある大学の警備員につかまってしまう。

裁判にかけられ処刑されるのだが、そのシーンは見る人の胸を打つ。しかし、監督のミヒャエル・フェアヘーヘンは、これで映画を終らせずに、次の一文を忘れなかった。

「西ドイツ最高裁判所の見解によれば、白バラグループへの判決は正当であり、現在もなお有効であるという」

つまり、フェアヘーヘンは、一見平穏無事な現在の社会においても、ナチズムと同じような潜在的潮流があり、ショル兄妹らを裁いた判事等が、戦後も、その多くが判事として働き続けているという状況を告発したかったに違いない。

あの「荒れ野の４０年」と題する演説で「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となる」となると説いた、大統領の西ドイツでさえ、である。

翻って、それは「国家秘密法」と題する法律案が再び上程されようとしているこの国の現実への告発として、鋭く私たちにせまってくる。

この映画「白バラは死なず」は、
12 月 6 日 19 時　立川中央公民館、
12 月 7 日 10 時、14 時立川綿公民館　にて自主上映される。
（前売り８００円、当日１０００円）

（１９８６.１１.１）